

ガブリエル・ロワ「象徴的風景」の考察に関する資料収集	
木下 敏江	比較社会文化学専攻
期間	2007年11月29日～12月9日
場所	カナダ モントリオール
施設	マギル大学フランス語フランス文学科

内容報告

1. はじめに

報告者はカナダのフランス系作家（ケベック作家）ガブリエル・ロワ Gabrielle Roy (1909-1983) の作品を学部から一貫して研究してきた。すでに修士論文『ガブリエル・ロワ「自伝的小説」における象徴的風景の考察』で検証したロワの自伝的小説3部作（*Rue Deschambault*, *La Route d'Altamont*, *Ces enfants de ma vie*）における「象徴的風景」の考察を、博士論文では彼女の全作品へと広げるため、幾つかの未刊行作品、ロワに関する研究文献・報告等を入手する必要がある。周知のように、本国におけるロワ研究及びケベック文学・作家に関する研究は少なく、国内での資料収集には限界があった。それとは反対に本国カナダでは、フランス系がそのほとんどを占めるケベック州はもちろん、他州の英語系社会でも英語翻訳という形ではあるが、ロワ作品は好んで読まれており、死後20数年経った現在でもカナダ各地の大学で活発にロワ研究がおこなわれている。とはいえその研究の中心はやはりケベック州モントリオールと言えよう。とりわけロワが生前より多大な信頼を寄せていた人物¹の一人、マギル大学フランス語フランス文学科の教授であり、自身も多くの著作を持つフランソワ・リカール (François Ricard) が所長を務める大学内の Le Groupe de recherche sur Gabrielle Roy がその名が示す通り、最大のロワ研究機関である。

さて今回の海外調査旅行（以下旅行と省略する）では、以前より博士論文を執筆するにあたり必要としていた、また報告者がこの2008年3月に開催される日本フランス語フランス文学会関東支部での発表を控え、日本では入手困難なロワの未刊行作品（ジャーナリスト時代の記事に関しては、2008年1月に刊行される予定であったため今回は見送ることにした）、彼女の作品に関する研究文献のコピー・閲覧を最大の目

的としていた。そのなかでも「象徴的風景」という視点から、ロワ作品において重要な位置を示すと言われている中編『木』*L'Arbre*のコピーは最優先事項であり、また時間が許す限り、膨大な未完の長編 *La Saga d'Éveline* も確認するつもりでいた。またマギル大学内のロワ研究機関を訪問し、リカール教授と面接することも旅行の目的のひとつであり、以下その成果を具体的に報告する。

2. 日本からの準備

オタワ国立図書館には、ロワの全作品、草稿、彼女に宛てられた家族・友人からの手紙、またロワが家族に宛てた手紙、未刊行の諸作品、ジャーナリスト時代の記事などそのほとんどが96の箱に入れられ保管されている²。これらは作家の意志によりリカール教授を中心に管理され、彼の許可なしに閲覧することはできない。そのため今回の旅行ではリカール教授に会うことは必要不可欠であった。幸運なことに、彼の20年来の友人である阪南大学の真田桂子教授の紹介をうけ、教授と事前にメールでの連絡が取れ、モントリオール到着直後（11月30日）に会う約束をしていた。

3. ロワ研究の中心：マギル大学 フランス語フランス文学科

モントリオールに到着したのは11月29日の夜半、空港はすでに雪で白くなり始めていた。出発前から懸念していたことのひとつは天候である。モントリオールの初雪は毎年11月25日ごろと聞いていたため、覚悟はしていたものの、この雪が今回の旅行の日程をおおいに狂わすこととなる。予約を入れていたホテルは、町の中心地に位置し、マギル大学まで一駅足らずの距離にあったため、とくに交通機関を利用する必要もなかった。翌日午前10時に大学の研究室でリカール教授と約束をしていたため、数センチ雪が積もるモン

オールの町を徒歩で向かい、教授と時間通りに会うことができた。

ところでモントリオールには4つ総合大学がある。モントリオール大学 (Université de Montréal) とケベック大学 (Université du Québec à Montréal) はフランス語の大学であるが、マギル大学 (McGill University) とコンコルディア大学 (Concordia University) では主に英語が使われている。今回、報告者が主に通うこととなったマギル大学は、蔦 (アイビー) の絡まる校舎の外観から「カナダのアイビー」校の異名を冠された、伝統と格式を誇る名門大学である。モントリオール市の中心部に位置し、学生の6割は州外出身であり、フランス語使用者は5分の1、7～8人に1人は留学生であるといわれている³。実際校内を歩くと、学生のそのほとんどが英語使用者である。

英語圏の世界に、突然現れるフランス語圏、それがマギル大学のフランス語フランス文学科である。正門の正面にアート・ビルディングという名の古めかしい校舎があり、その西側2階の奥の一角がフランス語フランス文学科である。至る所で英語が飛び交う中、授業は全てフランス語で行われ、教授も学生も全てフランス語で話す。中央に広めの学生室 (日本の大学で言うなら「助手室」) があり、そこを囲むように主なフランス文学科の教授の研究室が並んでいる。リカール教授の研究室もその一角にあり、教授の研究室の前に接した本棚には、ロワの著作 (あらゆる版) およびロワに関する研究文献が数段に渡り並んでいた。

当初の予定通り教授にオタワの国立図書館へ行く旨を伝えると、思いがけない言葉が彼の口から発せられる。「全ての資料は (コピーではあるが) ここにある」と。草稿研究をしている訳ではないため、手に入る資料はコピー原稿で十分であった。教授の好意により帰国までロワに関する文献のコピーと、フランス文学科の学生同様に、その学生室を自由に使ってよいと提案される。翌週の月曜日からモントリオールは大雪に見舞われ、町の交通機能が麻痺することを考えると、費用と時間をかけてわざわざオタワまで往復する必要がなくなり、この教授の提案は幸運の一言につきたわけである。早速その日から帰国までの約1週間、当初の予定通りコピーをして過ごすこととなる。コピーは全て付属図書館のコピー室で行ない、チャージ式カードを使用すると1枚\$0,07と日本に比べてかなり割安となった。

4. 資料収集

以下今回の旅行で収集したロワに関する具体的な資

料である。

<ロワの作品>

- ・ *Feuilles mortes* (nouvelle, 1947)
- ・ *L'Arbre* (nouvelle, 1970)

<シンポジウム>

- ・ Annette SAINT-PIERRE et Liliane RODRIGUEZ (dir.) (1985), *La langue, la culture et la société des francophones de l'Ouest, Actes du 4^e colloque du Centre d'études franco-canadiennes de l'Ouest, tenu au Collège universitaire de Saint-Boniface les 23 et 24 novembre 1984, Saint-Boniface, Centre d'études franco-canadiennes de l'Ouest.*

1984年11月23日・24日にサン・ボニファスで開催されたカナダ西部・フランス系カナダ人研究センターによるシンポジウム。ロワに関する論文4点のみコピー。

- ・ André FAUCHON (dir.) (1990), *Langue et Communication, Actes du 9^e colloque du Centre d'études franco-canadiennes de l'Ouest, tenu au Collège universitaire de Saint-Boniface les 12, 13 et 14 octobre 1989, Saint-Boniface, Centre d'études franco-canadiennes de l'Ouest.*

1989年10月12日から14日の3日間、サン・ボニファスで開催され上記センターによるシンポジウム。ロワに関する論文3点およびロワの作家である姉マリー＝アンナ・ロワに関する論文1点をコピー。

- ・ Marie-Lyne PICCIONE (dir.) (1991) *Un pays, une voix, Gabrielle Roy, Actes du colloque du Centre d'études canadiennes de l'Université de Bordeaux, tenu les 13 et 14 mai 1987, Bordeaux-Talence, La Maison des sciences de l'homme d'Aquitaine, 116p.*

ボルドー (フランス) で1987年5月13日・14日に開催された国際シンポジウム。フランス語圏の作家としてカナダでの評価は高いロワではあるが、フランスでの知名度は高いとは言えない。このシンポジウムの評価される点は、本国カナダではなくフランスで開催されたこと、発表者11名のうちフランス (ブルターニュ、ポワティエ、ボルドー、パリの各大学) からは4名、英語圏からはアイルランド、英国から2名、カナダ本国からは5名 (うち4名が英語圏) という内訳からわかるように、国際色が豊かであったところである。発表テーマは多岐に渡っており、未だ色あせない新鮮な研究内容となっている。またこの文献は報告者が長年手にしたいと渴望していたもののひとつでもある。

- ・ André FAUCHON (dir.) (1996), *Colloque international « Gabrielle Roy » . Actes du colloque soulignant le*

cinquantième anniversaire de Bonheur d'occasion, tenu au Collège universitaire de Saint-Boniface du 27 au 30 septembre 1995, Winnipeg, Presses universitaires de Saint-Boniface, 756p.

ロワのデビュー作『束の間の幸福』*Bonheur d'occasion* (1945) の刊行50年を記念して、1995年ロワの出身地マニトバ州サン・ボニファスで開催された国際シンポジウムである。50数名による750頁に渡る研究報告は、さまざまなテーマに関して論じられている。具体的には、ロワの5作品に関する12の論文、11のテーマに関する38の論文、版画1点である。とりわけ報告者にとって興味深い論文はL'ESPACEの項目の2点Diane KNOWLER《Deux voyageuses dans l'espace manitobain》と上記ポルドーでのシンポジウムの編者である Marie-Lyne PICCIONE《La dialectique de la plaine et de la montagne dans l'œuvre de Gabrielle Roy》である。また LE DISCOURSの項目Nicole BOURBONNAIS《Les sortilèges de la voix chez Gabrielle Roy》およびÉTUDES COMPARATIVESの項目Évelyne VOLDENG《Le symbolisme de la montagne dans *La montagne secrète* de Gabrielle Roy et *La montagne est jeune* de Han Suyin》も報告者の研究テーマに関連した発表であり大変参考になった。またJean-Paul Lemieuxによるロワの長編 *La petite poule d'eau* (1950) をイメージした版画は大変美しいものである。

<ロワ研究書>

・François RICARD, *Gabrielle Roy*, Montréal, Fides, coll. 《Écrivains canadiens d'aujourd'hui》, 1975, 192p.

今回お会いしたりリカール教授の、ロワ存命中に書かれた伝記。古典になりつつある文献であるが、写真など多く組み込まれた貴重な伝記である。リカール教授のはちにロワの膨大な自伝 *Gabrielle Roy : une vie*, Montréal, Boréal, 1996, 646p. を上梓する。

・Annette SAINT-PIERRE, *Gabrielle Roy : Sous le signe du rêve*, Saint-Boniface, Les éditions du blé, 1975, 138p.

ロワ作品における「夢」の研究書。

・Marie-Anna-A. ROY *Le Miroir du passé*, Montréal, Éditions Québec/Amérique, 1979, 289p.

ロワの姉であり作家でもあるマリー＝アンナ・ロワが家族に関して書いた貴重な著作。自叙伝『絶望と歓喜』*La Détesse et l'Enchantement* (1984) で、ロワは自身を語ったわけであるが、このように第三者、しかも近親者による視点からロワ像を読み取ることは大変興味深いことである。12点のロワの家族の写真も含む。

・Jean MORENCY, *Un roman du regard*. *La Montagne*

secrète de Gabrielle Roy, Québec, Centre de recherche en littérature québécoise, 1986, 97p.

ロワの長編『神秘の山』*La Montagne secrète* (1961) に関する研究書。

<雑誌特集>

・*Cahiers franco-canadiens de l'Ouest*, vol.3, n°1, (1991)

・*Cahiers franco-canadiens de l'Ouest*, vol.8, n°2, (1996)

1991年と1996年計2回ロワの特集を組む。各10名前後による研究発表。雑誌のロワ特集には彼女の未刊行作品（短編、ルポルタージュなど）が掲載されることが多い。1991年号には *Ma rencontre avec les gens de Saint-Henri* が、1996年号には *La légende du cerf ancien* が掲載されている。

・*Études Françaises*, vol.33, n°3, (1997)

6名によるロワの研究報告。ロワ未刊行作品（エッセー）*Germaine Guèvremont, 1900-1968* (1969) を含む。

・*Voix et Images*

ケベック文学専門の研究雑誌。年3回刊行されているが、その全巻がマギル大学にそろっていたため、ロワに関する研究を中心にコピー。

・その他 *Globe, Incidences, Études Canadiennes/Canadian Studies, Literature and Belief, Philological Papers, Les femmes de lettres* の各雑誌よりロワに関する研究報告をコピー。

思いがけない資料との出会いは、ロワに関するマギル大学の学生の「修士論文」と「博士論文」を閲覧することができたことである。とりわけ現在ロワ研究者として活躍中のクリスティーン・ロビンソン (Christine Robinson) とソフィ・マルコット (Sophie Marcotte) の博士論文を手にする事ができた。ロビンソンの博士論文はロワの膨大な未完長編 *La Saga d'Éveline* を丁寧に編み繋いだものであり、彼女の論文はロワの作品として読むことができる。またマルコットはロワの夫マルセル・カルボットとの往復書簡を丁寧にまとめたものであり、のちに *Mon cher grand fou... Lettres à Marcel Carbotte 1947-1979* [édition préparée par Sophie Marcotte, avec la collaboration de François Ricard et Jane Everett] Montréal, Boréal, 2001, coll. "Cahiers Gabrielle Roy". として刊行される。約2500ページの力作である。

5. 今後の予定

各論文執筆にあたり、日本において入手可能なロワに関する資料は収集してきたわけであるが、上記で報告したようにこれらの資料を手に入れることは長い間

困難であった。もちろん今回の旅行で全て必要な資料を手に入れたわけではない。今回は書簡に関する閲覧等は見送り、今春の学会発表に重要と考えられるロワ関連の研究文献のコピーに徹した。

今後の課題は、今回達成できなかった、国立図書館所蔵の彼女の人生に大きな影響を与えた母メリーナから彼女に宛てられた手紙やその他の家族からの手紙等の閲覧である。メリーナに関する記述はロワによって度々なされてきたが、彼女の生の声をきくことは日本には決してできない。これらを熟読することにより、母との関係がいかに関わりの作品に影響を与えたかを読み取れ、ロワ作品を解説する重要な鍵となるはずである。また、報告者の研究テーマに大きな影響を与えている研究者の一人、アーヴェイ (Carole J.HARVEY、ウィニペグ大学教授) のロワに関する研究発表は、今回3分の1にあたる4点しか入手することができなかった。次回はこれらを中心に論文の総仕上げとして手にしたいと思う。

6. さいごに

ロワ文学を研究することに何の意義があるのかと、たびたび皮肉まじりに問いかけることがある。あるドイツ人は「ロワ文学はどこか小津安二郎の映画の味わいを彷彿とさせる」⁴と語り、報告者自身、ロワ文学は向田邦子に通じる点があると以前から強く感じている。日加文学の比較が報告者の研究ではないが、ロワを研究することは日本文学・文化を再認識する切

掛けになることは間違いないと信じている。

リカール教授には改めて謝辞を述べたい。前述したようにロワ最新刊、彼女のジャーナリスト時代の幾つかの記事を1冊にまとめた*Heureux les nomades et autres reportages: 1940-1945*, Boréalを教授から「お土産」として頂くことができ、さらに2009年秋にロワ生誕100年を記念して開かれる国際シンポジウムへの招待も約束してくれた。また彼の同僚であり同じくロワ研究者であるジェーン・エヴェレット教授にも日本でロワ研究をすることを評価すると激励された。また阪南大学の真田桂子教授には出発前から多くの助言を頂き、心から感謝していることを最後に記しておく。

注

1. ロワは晩年、ガブリエル・ロワ基金FONDS GABRIELLE ROY INC.を設立し、自身が所有する草稿・手紙・契約書などその全てを基金に譲渡する。その際、夫のマルセル・カルボットMarcel Carbotteを中心に、その他ルネ・デュビユイ、アンドレ・マジヨール、ジル・マルコット、ピエール・モレンシーとフランソワ・リカールを基金の管理者として任命している。
2. François Ricard, *Inventaire des archives personnelles de Gabrielle Roy*, 1991, éditions du Boréal.にロワに関する全資料の収集先が出ています。
3. 『カナダ留学事典』アルク、1999年、219p.
4. ロワ (真田桂子訳)『わが心のらよ』溪流社、1998年、249p.

きのした としえ／お茶の水女子大学大学院 比較社会文化学専攻

【指導教員のコメント】

私の指導学生、比較社会文化学の木下敏江のこのたびの「学生海外調査研究」は、報告書に詳細に記録されているように、非常に収穫の大きい研修となった。それは、第一に、研修前に、先輩の研究者から情報をしっかりと得ていたこと、また、木下の研究対象である作家ガブリエル・ロワの友人であり、現在カナダ、モントリオールのマギル大学の仏文教授にして同大学のロワ文学研究所の長でもあり、いわばロワ研究のキー・パーソンであるリカール教授と面接し、同大学にある全ての資料をコピーする許可が得られたからである。これは、まさに海外調査によって初めて与えられるチャンスであった。この機会に木下は、長年入手を希望していた、未刊行作品や、シンポジウム記録などのコピーをすることが出来、上記の研究テーマについての、先ずは今春の仏文学会での発表の資料が得られただけでなく、ゆくゆくは、博士論文の資料として活用できるであろう。このような機会が与えられたことを、指導教員としても、衷心より感謝申し上げる次第である。

(人間文化創成科学研究科 教授 中村 弓子)